



Title	モンゴル文学100年と日本におけるモンゴル文学研究 50年：その道程、現在地、そして危機と新たな道
Author(s)	芝山, 豊
Citation	モンゴル研究. 2025, 34, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103473">https://doi.org/10.18910/103473</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《創刊 50 周年に寄せて》

# モンゴル文学 100 年と日本におけるモンゴル文学研究 50 年

## その道程、現在地、そして危機と新たな道

芝山 豊

### はじめに

2025 年の夏、モンゴル研究会『モンゴル研究』誌の編集長から、「創刊から 50 年目にあたる今年、創刊号編集メンバーとして、文学関係の研究分野から 50 年を振り返って何か自由に書いてほしい」との依頼が届いた。

『モンゴル研究』創刊号は、1974 年から 1975 年にかけて準備され、1975 年 2 月 10 日付けで発行された。当時、創刊を決議し、編集にあたったのは、全員、大阪外国語大学モンゴル語科のモンゴル研究会の学生会員であった。出版資金捻出のために、早朝、皆で道路沿いの交通量調査のアルバイトをしたり、遅筆の執筆者に毎日のように催促をかけて「鬼」呼ばわりされたりしたが、タイプ孔版印刷 101 頁のささやかな雑誌が印刷所から届いたときの会員たちの嬉しそうな顔がいまも忘れられない。

1975 年からのモンゴル文学研究の 50 年を語るとすれば、さらに遡ること 50 年、1925 年にモンゴル人民共和国で始まった「国民文学」創生の流れを略述しなければならないだろう。その上で、1970 年代から今日まで、モンゴル研究会文学部会のメンバーが、志を同じくする研究者をはじめ、詩人、作家などと、ともに歩んだ道程を思い出として語ることになる。次に、現在の日本のモンゴル文学研究の現在地を示す研究事例を紹介して、最後に、AI 時代の人文学が直面している危機を少しく論じ、明日のモンゴル文学研究を担う若い世代への期待とエールを綴ることで、この分不相応な依頼への応えとしたい。

なお、以下、記述の都合上、人名をあげる場合、長幼、面識の有無を問わず、敬称を省くことをお許しいただきたい。お名前をあげる、あげないに拘わらず、学恩あるすべての方々への敬意と感謝は、昔も今も、これからも、決して変わることがないことを申し添える。。

## I. モンゴル文学研究の道程と道路元標

### モンゴル文学の道路元標 (Zero Milestone)

100 年前、1925 年 (大正 14 年) の日本には、既に国立の外国語学校 2 校に蒙古語専攻課程 (東京 1911 年、大阪 1921 年) が存在した。しかし、そこではまだ「モンゴル文学」の本格的研究は行われていなかった。勿論、1907 年の『成吉思汗実録』那珂通世訳注 (大日本図書株式会社 明治 40 年 1 月 18 日発行) をもって、日本のモンゴル文学研究は既に誕生していたと強弁することもできるかもしれない。

いし、語学教育の素材として文学作品が用いられることもあったろうが、少なくとも、当時、「日本文学」とか「ロシア文学」とかいう場合に概念される、民族国家の「国語」による modern literature としての概念での「モンゴル文学」は大日本帝国の官立学校の研究の対象ではなかったのである。

しかし、1925年のモンゴル高原では、「モンゴル人民共和国の国民文学」を創造するという一大事業が始まっていた。

1924年11月に世界で2番目、アジアで最初の社会主義国家として誕生したモンゴル人民共和国が「国民」創成に取り掛かるに際し、1925年、エルデニバトールハンがゴリキーに宛てた手紙とゴリキーからの返信によって示された方向性が、「モンゴル国民文学」を方向づける道路元標 (Zero Milestone) であったと言えよう。

当時、まだ、スターリンの庇護を受ける前のゴリキーは、モンゴル知識人に翻訳すべき書物について、以下のように忠告した。

ヨーロッパが科学、芸術、技術の領域で世界の他の諸族の先頭をきって進んだのは、けっして苦悩することを恐れず、現に所有しているものより良いものを望んできたからです。・中略・私の考えでは、パスカル、ファラディのような科学者と同様、フランクリン、ガルバルジーその他のような名人の伝記が有益でしょう。こういう伝記は芸術作品に劣らず教育的に重要です。後者のうちから、正義と解放の理念の規範となる人間のヒロイズムがもっとも明確に示しだされているものを選ぶ必要があります。(松本忠司編訳 『ゴリキー文芸書簡Ⅱ』光和堂、1973年)

ゴリキーのこの忠告は、乱暴に単純化してしまえば、パターンリズムの臭いのする、一種の近代化論であり、西洋モデルを踏襲する国民文学への道を示すものであった。

時代は、ロシア・アヴァンギャルド華やかな時代である。1925年からのモンゴル文学は、世界でも類をみない自由な文学の実験室になる可能性を秘めていたのだ。しかし、その事業を担うべく、エルデニバトールハンがドイツやフランスに送り出した青年たちが、西洋の文化や芸術に耽溺し、祖国の近代化を夢見つつ、西ヨーロッパ的生活を謳歌できた時代は、瞬くうちに過ぎ去った。

ソ連で「社会主義リアリズム」という用語が正式に定義される前、1920年代末から、ゴリキーの忠告によるモンゴル文学の道標は、乱暴にその向きをかえられた。モンゴル文学黎明期の詩人や作家たちは、ヤコブソンに倣えば「詩人たちを浪費する」時代の中で政治と格闘することになった。道標が示す先は、近代西洋文学型のリアリズム文学でも、革命的ロマン主義文学でもなく、ボルシェビキの「教導」と人民革命党の「指導」の下に「資本主義を飛び越えて」存在することを運命づけられたモンゴル語版の(シニャフスキーの言葉に従えば)「社会主義古典主義」への道であった。しかし、皆が皆、唯々諸々とその道標に従ったわけではない。

1930年代当時の普通の日本人にとって、モンゴル人民共和国は、足を踏み入れることができない国であり、その他の地域のモンゴル人たちは、自らの国家や国語をまだ手にしてはいなかった。『蒙古年鑑』(1936年)の蒙古文学の項に、小林高四郎が「偉れた民族文学の出現する日を翹望してやまない」と記したことで分かる通り、モンゴル人民共和国の「国民文学」に関する情報は日本にはほとんど届いておらず、内モンゴルや東モンゴルの「モンゴル近代文学」は、専ら、日本へ留学したり、現地の日本語教育の中で学んだりした人々に担われて、その産声をあげようとする時代である。どこの地域のモンゴル語でも、直接的な借用語表記の他の literature にあたるモンゴル語の訳語を確定できていな

かった。モンゴル文学の道の元標が建てられてから、30年、つまり、一世代を経た頃には、モンゴル人民共和国では、押し付けられたキリル文字正字法による教育の成果として、「文学」はキリル文字で、*уран зохиол* または *утга зохиол* の2語で表現されるようになっていたが、両語の違いが明確に定義されていたわけではない。モンゴル文学の道は常に「普請中」であった。

### モンゴル研究会文学部会と『モンゴル研究』創刊

戦後の日本では、1960年代末、東京外国語大学、一橋大学大学院を経て、さらにドイツ留学を経た社会言語学者田中克彦(当時東京外国語大学助教授)が、一般の人々の目に触れる記事の中で、モンゴルの国民文学に触れ、D. ナツァグドルジの詩なども紹介し始めるが、モンゴル文学への関心の状況が大きく変化したのは、「日中国交正常化」、「沖縄復帰」と同じ1972年の日本とモンゴル人民共和国の国交樹立からのことである。

1970年に正式に誕生した大阪外国語大学モンゴル研究会に文学部会が誕生したのも、まさに、この年1972年である。

大阪外国語大学から東京外国語大学大学院に進み、後に札幌国際大学で温泉教授として知られることになる松田忠徳は、1974年7月に『草原と炎 モンゴルの詩人選集』というモンゴル現代詩のアンソロジーを出版し、そのあとがきで次のように語っている。

少数民族の言語に属するモンゴル語も、他の少数民族の言語同様に、満足な辞書もなかった。国交のなかった当時、モンゴルから思うように本が手に入らず、二、三十冊注文して一冊でも届けば上出来だった。

松田は、モンゴル研究会のメンバーではなく、1975年の『モンゴル研究』創刊の頃には既に大阪を離れていたが、1970年『砂漠』誌に発表した、D. ナツァグドルジやD. ツェベグミドの作品の秋津紀穂名義での翻訳や、評論等は大阪外大の同期や後輩のメンバーにも共有されていた。(『砂漠』には、上岡好子、荒井伸一、精松源一の翻訳も掲載されていた。)

モンゴル研究会文学部会の誕生から『モンゴル研究』創刊の頃までも、まだ学生たちが個人でモンゴルの書籍の入手するのは極めて困難なことであった。学生たちは、運よく手に入れた書籍やその青焼きコピーを共有しながら、モンゴル近代文学の体系的研究に挑戦したのである。

当時、大阪外国語大学の専任教員のカリキュラム上にあったモンゴル文学史は、荒井伸一(大阪外国語大学教授)によるものであった。戦後から1960年代まで、モンゴル語の文献がなかなか入手できない時期には、ロシア語、中国語を手がかりに研究を進める他なく、『蒙古文學發展史』(巴・索特那木著、謝再善譯、上海、文化生活出版社、1954)やミハイロフの『蒙古現代文学簡史』(張草纫譯、北京、作家出版社、1958)等の文献を基に当該のモンゴル語原文にあたって作成されたノートに依っていた。

モンゴル研究会のメンバーたちは、こうした資料だけでは満足できず、文学理論研究のグループを作り、主に、1968年版のモンゴル人民共和国科学アカデミー編纂現代文学簡史の叙述と紹介によって、作品を選び、その翻訳を開始したのである。

当時、学生たちが手にしていた文献がどのようなものだったかは、学生たちのアドバイザーであり、また、対等な議論の相手でもあった山口幸二(当時、大阪外国語大学留学生別科専任講師)が書いた「1920・30年代のモンゴル文学」(「中国文芸研究会『野草』14/15号116～129頁1974年4月」)

から知ることができる。

「新しい文学は、新しい人間とともにある。現実、たえず新しい人間を生む。文学とは、まさに、その新しい人間の考察である。」というS・ロブサンワンダン(山口の当時のカナ表記では・ルブサンワンダン)の言葉を掲げて始まるその論文の冒頭には以下の感慨が示されている。

本小論を書くにあたって、私はいま、ある大きな感慨に満たされている。いま私の手元に、600ページに及ぶ大著『モンゴル現代文学概史』(1966、ウランバートル)、作品収録数10972に及ぶ『現代モンゴル文学作品大観—1921~1965』(1965~66)、現代モンゴルの優れた文学研究家S・ルブサンワンダンの手になる『現代モンゴル文学の英雄(主人公)』(1965)がある。更に、すぐ利用できるところに、優れた大長編小説、B・リンチンの『曙光』(1951~1955)、Ch・ロドイダンバの『清らかなタミール』(1961)を初めとした多くの作品群がある。

満足に辞書もなく、大阪ではモンゴル人の教官がひとりもない状況で、こうしたテキストと格闘しながら、大阪外国語大学モンゴル研究会文学部会の研究活動はスタートした。

文学部会の活動最初の成果は、モンゴル研究会の文学部会発足の1972年夏合宿の報告書として発表された赤石洋通、井上清昭、石原光沢『モンゴル現代文学概史』であった。

1970年代前半の大阪外国語大学『世界のわかものよ』には、松田(秋津)以外にモンゴル研究会の草創期のメンバーによる翻訳作品が並んでいる。赤石洋通、井上清昭ら文学部会の創設メンバーの翻訳の他にもある。例えば、D・ナツァグドルジ「正月と悲しい涙」は歴史部会の山本雅博による翻訳である。

1973年になると、新入生メンバーが大幅に増え、銘々が、印象批評、ニュークリティシズム、フォルマリズム、受容理論、記号論など、まるで、筒井康隆の小説『文学部唯野教授』を彷彿させる種々様々な文学理論を読み漁り、ルカーチやバフチンを輪読したりしていた学生たちは、理論が現実のモンゴルの文学に当て嵌まるのか、否か、モンゴル文学史に取り上げられている作品の山にとりついて、翻訳を試み、飽かずに議論した。

上本町六丁目から南に下り、うっかりすると見過ごしそうな小さな門から、「烈士の碑」の前を抜け、大阪大空襲の中、辛うじて焼け残った図書館と反対側の階段を昇って、戦後の安普請校舎の教室と研究室、その上にプレハブの箱を載せたような粗末な部屋で、「何故、この詩は美しいのか?」、「何故、モンゴル文学は面白くないと言えるのか?」等について真面目に議論した。議論は教室を出たあとも、戦後焼け跡の雰囲気を感じていた駅前路地の飲食街で延々と続けられた。

大阪外国語大学のモンゴル研究会は、件の学園紛争の直後にスタートし、もともとは、歴史や社会科学分野での研究を中心とする趣が強かったのだが、『モンゴル研究』の創刊号から4号までは、文学部会のメンバーの文学関係の論文や翻訳が際立って多い。

『モンゴル研究』創刊と研究会に拠るモンゴル文学の研究は、まだ、道とも呼べぬ、「けものみち」程度のものだったが、若者たちが踏みしめることで拓いた道だった。

モンゴル文学作品の翻訳の試みは東京外国語大学にも大阪外国語大学、他の場所でも、個人的な試みとしてあったし、語学学習上の素材としても存在した。しかし、『モンゴル研究』誌初期のモンゴル文学に関する翻訳や記事の数々は、ソビエト社会主義連邦や中華人民共和国からの出版物を介することなく、作品原文を読みこんで、モンゴル人民共和国の見解を批判的に吟味することから、「モンゴル

文学」の固有の価値を探り、また、その普遍性を大系的に明らかにしようとする、日本で初めての「集団的な試み」であったと思う。

当時、モンゴル研究の世界では、歴史学や政治学、経済学、人類学、言語学の研究であれば、発表の機会はなくもなかったが、まだ周知されていない現代モンゴル文学の研究成果を発表し得る開かれた場は存在していなかった。

大阪外国語大学モンゴル研究会の歴史部会、文学部会が一緒に立ち上げた『モンゴル研究』創刊号には、学生自ら発表の場をたちあげ、日本におけるモンゴル文学研究の道を切り開くのだという強い意志と若い気負いがあった。

『モンゴル研究』No1からNo4(1975-1978)の4号だけで、モンゴル文学作品の翻訳13篇が掲載されている。ボヤンメネフ「暗黒政府」(上野敏宏訳)、ナツァグドルジ「旧き子」「恋」(芝山豊訳)「ラマの涙」(川上郁雄訳)「冬と春の叙情」(織田幸彦)、ダムディンスレン「ソリを変えたもの」(中西和隆訳)、「二人の息子」(千歳正信訳)エルデネ「太陽の鶴」(上野敏宏訳)バダルチ「香燭のともしび」(千歳正信訳)、ルハムスレン「蓄音機」(中西和隆訳)、オドバル「花束」(林芙美子訳)、ガル「笑い話」(三枝美穂訳)「昔話:ずる賢いおじいさん」(河口美智子)。また、この他に『現代モンゴル文学概史』関連年表1～3、ハスパートル「革命と文学」(赤石洋通訳)が連載されている。

論文では、いまでも、モンゴル文学研究者が参照する赤石洋通の「ボヤンメネフ 嵐の中の帆船」(『モンゴル研究 No.2』1976年)や、中西和隆の「ダムディンスレンの「昨日」と「明日」」(『モンゴル研究 No.4』1978年)などがあり、これらは「けものみち」に咲いた野の花である。

狭義の文学研究だけでなく、芦本滋、谷博之らによる言語分会も並走していた。この言語部会は、当時の「猫も杓子も生成文法」的流行追随とは一線を画し、言語における「美」を強く意識していたように見えた。

『ロシア・フォルマリズム文学論集』が日本語訳で出版されたのは1971年、ヤコブソンの『一般言語学』の翻訳は1973年に刊行されている。言語学が必修で、嫌でもこれらに目を通していた『モンゴル研究』創刊の頃のメンバーは、口承文学を現代文学の下に置くような発想を全くもっていなかった。大阪外国語大学から大阪大学大学院を経て、後に、日本語教育分野の研究者として、宮城教育大学、早稲田大学で教授をつとめた川上郁雄の「イェルール考」(『モンゴル研究 No.3』1977年)がそのことをよく物語っている

モンゴル研究会では、多くのメンバーが歴史部会、文学部会、言語部会に重複して顔を出していたので、各々が学問領域の掟に縛られることもなく、「民俗学」や、「モンゴル民衆思想史」といった学域横断的な様々な試みを勝手放題に始めていた。

しかし、大阪外国語大学が眞面に移転する前、1970年代末になると、『モンゴル研究』創刊号の頃の学生メンバーはすべて社会に出て、生活に追われるようになった。後継者として期待された学生会員が次々モンゴルへ留学するなどの事情もあり、1979年～1981年の時期、『モンゴル研究』誌刊行は一時途絶えてしまった。

### モンゴル研究会文学部会休眠期

『モンゴル研究』の定期発行が再開した1982年以降、モンゴル研究会の主流は、小貫雅男(当時、大阪外国語大学教授、後に、滋賀県立大学教授)のゴビ・プロジェクトにつながる社会科学系への研究

ヘシフトしていった。とはいえ、モンゴル研究会創設当時、歴史部会を指導し、学生と平場で議論をしていた小貫雅男は、京都大学大学院の学生であった頃、Ts. ダムディンスレンに関する論文を書いており、モンゴル国立大学招聘教授時代、晩年の Ts. ダムディンスレンにインタビューして音声記録をとっている。(当該資料は中西和隆の研究にも提供されたと聞いた記憶がある。) また、ゴビ・プロジェクトの頃、『モンゴル研究 No.12』1989年には、Ts. ハンドスレンとの交流を通じて、モンゴル人民共和国時代には顧みられることのなかったツェンドによる『元朝秘史』初の現代モンゴル語訳(モンゴル伝統文字表記)を写真印刷で掲載している。

『モンゴル研究』出版が滞っていた時期にも、文学研究の「けものみち」を歩む者が全く絶えたわけではなかった。1987年、拙著『近代化と文学 モンゴル近代文学史を考える』がアルド書店から出版された。これはひとえに渡辺聡の尽力によるものであった。渡辺は大阪外国語大学から初めてモンゴル人民共和国へ留学し、帰国後、大阪外国語大学大学院生として、『モンゴル研究』出版の仕事を支え、学位取得後は、モンゴルで活躍するビジネスパーソンとして、後には、モンゴル国友好勲章を受けることになった人物である。学生時代、仏教史やインジナシ(インジャンナシ)の研究していた渡辺が創設したのがアルド書店である。現在は、渡辺の大学同期でモンゴル留学組の吉本るり子が運営し、吉本周平とともに、いまも、『モンゴル研究』誌出版を支え続けている。

『近代化と文学』出版時、版下原稿は、満足なモンゴル語のフォントもなく、多言語スペルチェッカーは勿論のこと、ろくな校正機能もないワープロ専用プログラムで作成されていた。加えて、当時、著者、編集者ともに、口に糊する仕事に文字通り忙殺されており、校正に時間がほとんど取れないまま、印刷所の締め切り期限を迎え、正誤表の貼り付けが間に合わなかった。東京外国語大学の岡田和行(当時、東京外国語大学専任講師)が講義の参考図書として使用した際、その誤植の多さを学生に呆れられるほどだったが、1987年のウランバートルでの国際モンゴル学会議(現在の I A M S)の陳列台に無事並べられた。実は、説明文が全くついていなかったのも、日本語の読める参加者以外には、誰のどんな本なのかわからなかったのだが、モンゴル文学史に関する日本語の本がそこに置かれているということだけで、胸が熱くなったことを覚えている。5年前の同会議で面識があり、本の中でも引用した K.N. ヤツコフスカヤに本を謹呈すると、日本語が読めない彼女は表紙のイラストをととてもほめてくれた。

その年、『モンゴル研究 No.10』に注目すべき詩の翻訳と詩人紹介が掲載された。

賀川明による「ボルジギンの蒼き草原」である。ウランバートル留学中の賀川は、冷戦下社会主義時代の制約を乗り越えて、直に詩人たちに会い、作家同盟のメンバー達との個人的な交流を通じて、モンゴル文学研究を独自の方法で拓きつつあった。

ウランバートルで賀川に会った時のことをいまでもよく覚えている。街を歩きながら、チェルノブイリ原発事故後、モンゴルに何が起こったのか話してくれたあと、強い口調で言った。「芝山さんは、確かに、D. ナツァグドルジは読んでいるだろうけど、いまを生きているモンゴル作家の文学をちゃんと読んでいない。」

その頃、口に糊する仕事の他は、文学史の執筆やナツァグドルジの手稿のテキスト批判にかかりきりだったので、返す言葉もなかったが、時代が大きく変わろうとしていることを予感させる言葉だった。

1989年、天安門事件の後、ベルリンの壁が崩れる少し前、筆者は、村井宗之、岡田和行、斎藤純

男らとウランバートルで開かれた若手研究者のセミナーに参加し、ナツアグドルジの「黒い岩」についてモンゴル語での発表を行った。2年前の国際会議で英語発表中、モンゴル語への同時通訳が放棄され、発表者のマイクも切られた経験をもつ者として、反応に一切期待はしていなかったのだが、話し終わるや、モンゴル人参加者から大きな拍手を受け、多くの質問を受けることになった。(新聞のインタビューは日本人の給料に関するものだったが。)

この学術交流は、モンゴルに限らず、他の国々のモンゴル文学研究者を『モンゴル研究』誌に結びつけた。例えば、ロシアのモンゴル文学研究者、サンクトペテルブルク大学のマリア・ペトロヴァは、後に『モンゴル研究 No.15』(1993年)に、モンゴル語で現代モンゴル詩のテーマに関する論文を投稿している。

1989年を境に、徐々に、モンゴル人の作家や研究者と「本音」で話をするのができ、真正のテキストにアクセスする可能性も増えてきた。とは言え、その後、数年、モンゴルは大混乱に陥ることになる。飛び越えたはずの「資本主義」が「市場経済」と名をかえて国民を呑み込んだ。モンゴル作家同盟も分裂してしまう。1989年にモンゴル人民共和国科学アカデミーから約束されたD. ナツアグドルジの手稿への完全アクセスが可能になったのは、それから5年も経った1994年のことであった。

その1994年、5月、筆者はD. ナツアグドルジの娘アーナンダー・シュリーへのインタビューを行っている。翌年1月、彼女の訃報を受けて、インタビューを文章化し、『モンゴル研究 No.16』(1995年)に掲載した。記事はチョルモン(現内モンゴル師範大学教授)によってモンゴル語に翻訳され、内モンゴルの雑誌に掲載され、後にモンゴル国でもキリル文字化されて読まれた。S. エルデネへのインタビューや、賀川明が日本に紹介したバボーギン・サグワスレン(文字転写表記の場合はルハグヴァスレン)と話し合いながら彼の詩を訳す機会も得たのも同じ1994年だった。これらの経験に基づいて書いた拙文は季刊誌『グリオ』(現代社会と文化の会[代表=加藤周一]、平凡社)に掲載された。そうした縁もあり、B. サグワスレンは、後に、日本モンゴル文学会の名誉顧問も引き受けてくれた。また、彼と親交のあった、モンゴル通としても知られた詩人有馬敵との交流も生まれた。

残念だったのは、B. サグワスレンだけでなくウランバートルの作家や詩人に会うたびに、「アキラはどうしている？」と聞かれて答えに窮したことである。その頃から賀川明の消息は『モンゴル研究』編集に携わる仲間の間に全く伝わらなくなっていた。

モンゴル人民共和国がモンゴル国となってから、日本におけるモンゴル研究は、「満蒙」時代に逆戻りしたかの如く、専ら、実利的な方向へとシフトして行った。そうしたモンゴルブームの中で、モンゴル文学研究者にスポットライトが当たる機会はほとんどなかった。『モンゴル研究 No.10』の賀川の翻訳以降、1988年から2000年までの『モンゴル研究』誌に掲載された翻訳はわずか3篇である。

大学の学生の気質も変わり、モンゴル研究会の文学部会も一種、休眠状態となっていた。

『大阪外国語大学70年史』(大阪外国語大学70年史編集委員会編 大阪外国語大学70年史刊行会1992.11)には、文学関係の教育担当者として、当時非常勤講師であった2名の『モンゴル研究』創刊時のメンバーの名をあげているが、『大阪外国語大学70年史』出版の後、一時据え置かれていた文学担当荒井伸一教授退官にともなう後任人事では、公募に設けられた不可思議な年齢制限によって、二人とも排除されていた。以降、大阪外国語大学、大阪大学外国語学部において、狭義のモンゴル文学を専門分野とする日本人研究者が専任職につくことはなかった。



### モンゴル研究会文学部会再開から日本モンゴル文学会へ

『モンゴル研究』創刊から20年が経とうとする1995年、近畿は、阪神淡路大震災にみまわれた。関西在住の研究会員も多く被災者となった。筆者は、サバティカルの米国研修中で、幸い家族は無事だったが、拙宅、実家ともに全壊認定を受けた。想像を絶する事態に、急遽の帰国前後の記憶が定かではないが、国内の友人、知人をはじめ、モンゴルや米国の友人たちからの暖かい励ましを得て、被害のほとんどなかった箕面の大阪外国語大学に出講するようになると、意外にも、学生からモンゴル研究会文学部会を再開したいという希望が寄せられた。学生の強い熱意に押され、震災の傷跡が生々しく残る JR 芦屋駅前の倒壊を免れたホテルのティーラウンジで文学部会が再開された。

その後、徐々にメンバーも増えてモンゴル研究会の文学部会は完全復活したのだが、1997年度末から筆者が関西を遠く離れることが決まり、モンゴル研究会文学部会の運営をどう維持するのか、頭を抱えることとなった。当時、未だ、ブロードバンド接続はなかったものの、日本でもインターネット時代の幕があがり始めた頃であった。物理的な空間の制約を超え、WEB利用とフェイス・トゥー・フェイスの集まりのハイブリッド型研究会を世界的な規模で構築しようとの構想が生まれ、早速、試行に移すことになった。

1998年、清泉女学院短期大学(現在の清泉大学)に事務局を置いて、日本モンゴル文学会が創設された。翌年には、『モンゴル文学を味わう』(国際交流基金アジアセンター)の編著者である東京外国語大学の岡田和行、上村 明、海野未来雄ら旧知の面々の協力を得て、なにかにつけて、角逐する関係と思われがちであった大阪外国語大学と東京外国語大学の出身者が協力しあって、所属の枠を超え、広く開かれた枠組みで結集し、自由にモンゴルの文学について語りあう日本モンゴル文学会の活動が始まった。

日本モンゴル学会もまだ公式のWEBサイトを立ち上げていない頃で、「日本モンゴル学会を検索すると、日本モンゴル文学会のサイトが出てくるのはけしからん」などというお門違いの文句を言ってくる人さえいた。この手のクレーマーはいつでもいる。『モンゴル研究』と称する学術雑誌は本誌の他にも幾つかあるのだが、創刊は大阪外国語大学モンゴル研究会が最も古い。創刊時より、国立国会図書館に送本し、『史学雑誌』の回顧と展望にも記述があるのだから、ちょっと調べればわかることなのだが、ある団体が、こちらが正統な『モンゴル研究』だから、そっちが名称を変えろと言ってきたこともあった。

開設間もないWEBサイトは、原始的な方法でHTMLを自分で書いていたが、要領の悪さを見かねた松本在住の大阪外国語大学出身田渕人司(信濃むつみ高校)が一時助けてくれた。

さらに、東京外国語大学側では岡田和行(当時東京外国語大学助教授)、大阪外国語大学側では谷博之(当時大阪外国語大学非常勤講師)とゴビ・プロジェクトの今岡良子(当時大阪外国語大学専任講師)の協力を得て、東京と大阪での定期的な研究発表会の実施が実現した。

この頃、モンゴル人民共和国時代の官製文学史とは異なる、新しいモンゴル国の文学史が続々と出版されていた。そこには、かつては言及されることのなかった文学理論からの分析もあり、文学用語の刷新も始まっていた。そうした部門の第一人者のひとりがD. ガルバータル(当時、モンゴル国立大学教授)である。1994年のモンゴルでの調査研究中に世話になった彼が東京外国語大学の招聘教授として来日することとなり、岡田とともに日本モンゴル学会にも参加してくれた。大阪、東京の外国語大学の学生だけでなく、様々なバックグラウンドをもつ人々がモンゴル文学会と関わるようになって

いた。大阪外国語大学の招聘教授、B. サラントヤー（当時モンゴル国立大学准教授）、サイチング研究の都馬バイカル（現桜美林大学教授）など、モンゴル地域への留学経験者や、それら地域からの日本留学経験者、在日本のモンゴル人研究者など、国籍や所属を問わず、様々なモンゴル文学に関心をもつ人々が参加することとなった。

21世紀に入った2001年の春・秋の文学会の記録を見ると、岡田、芝山を除く発表者は、荒井幸康、内田孝、海野未来雄、オンドルナ、ガルバータル、佐々木友香、谷博之、二本博史となっている。発表者の他にも多くの参加者があり、その中には、後の日本モンゴル文学会を支えることになる大切な人々がいた。

### 『モンゴル文学への誘い』出版

日本モンゴル文学会のメンバーは、モンゴル人民共和国・モンゴル国の国民のみならず、さらに広義のモンゴル人の作品も視野に入れた、より広義な「モンゴル文学」という視点から、翻訳と論文に資料を付した出版物を企画した。

当初、当時大阪外国語大学大学院博士課程の学生であった内田孝の詳細な文献表や翻訳予定作品リストを基に計画検討が始まったのだが、残念ながら、内田の構想を十分に生かすことができなかった。幾つかの出版社に打診したが、結局、商売にならないと断られた。最後に、佐藤紀子（日本モンゴル文化経済交流協会設立者）と一緒に仕事をしていた内田敦之の紹介で、『差別語からはいる言語学入門』（2001年）の出版で田中克彦とも親しかった明石書店創業者石井昭男社長に直談判し、『モンゴル文学への誘い』（明石書店 2003年）の出版が決定した。なんとか、初版を売り切ることができ、2013年には誤植の修正や資料を増補したオンデマンド版も制作された。

初版の出版に際し、前年の「学術奨励賞」副賞賞金をほぼ全部使い果たしてしまったのだが、これは、学生時代に、手弁当体制で、『新蒙日辞典』をつくり、手売りしていた精松源一（当時大阪外国語大学名誉教授）を見ていたせいで、「モンゴル関係の出版とビジネスが一致しない」という思考回路が頭の中にできてしまっていたのかも知れない。後日、出版に詳しい執筆者の一人から「詳細な出版契約書を作成することの重要性」について友情溢れる忠告を得て、なるほどと大いに啓蒙された。執筆者全員の善意と寛容に助けられたのだが、ビジネスセンスが全く欠如していたが故に、当時、担当を引き受けてくれた大江道雅（現明石書店社長）に無理を言って、出版界の常識を全く無視した、翻訳アンソロジーと研究論文集と資料集をひとつに詰め込んだ本を作ることができたのかもしれない。

かくて、松田忠徳・蓮見治雄・荒井伸一編訳『帽子をかぶった狼 モンゴル短編集』（恒文社 1984年）とは全く異なるタイプのモンゴル文学の紹介の本が世に出たのである。

当時、筆者は、大学設置の仕事に忙殺されて、最終校正作業にほとんど出られず、共編著者である岡田、明石書店の佐藤和久ら在京の方々に過大な負担をかけてしまったが、おかげで、阿比留美帆、荒井幸康、内田孝、内田敦之、海野未来雄、谷博之、津田紀子、深井啓、山本裕子という多彩な執筆者を得て、インジャンナシの紹介、半ばカノン化した作品から、70年代悪女小説、現代詩、ブリーヤート、カルムイクの文学、児童文学、留学政策、オニゴー、最新のクイア理論に至るまで、広く一般の読者に現代モンゴル文学の輪郭を感じてもらい、今後の研究に資する詳細な資料をも付す、世界でも類を見ない、ユニークなモンゴル文学案内を世に送り出すことができた。

モンゴル研究会文学部会発足から30年が過ぎ、大阪や東京の大学だけでなく、多くの場所で、道半

ばで、研究を離れざるを得なかった諸先輩、後輩諸氏の思いも繋ぎ、さまざまな枠組みを超えて、文学を愛する人たちを「モンゴル文学の愉しみ」へ誘い、日本とモンゴルを結ぶ新たな道への道路元標を据えることができた。この出版を評価し、2006年、モンゴル作家同盟は編著者2名へ「文学功労賞」を贈っている。

### 日本モンゴル文学会『モンゴル文学』誌発行

『モンゴル文学への誘い』出版以降、日本モンゴル文学会は、モンゴル作家同盟をはじめ、同盟から離れたグループの人々、そして、作家 G. アヨルザナの村上春樹の翻訳などを生むことになる日本文学をモンゴル語で紹介する立場の人々との交流も深まった。芥川龍之介のモンゴル語訳で受賞している L. アディアスレンら優れた才能の持ち主も多くの貢献をしてくれた。

モンゴル国の作家同盟幹事長チラージャブからの祝辞も掲載された日本モンゴル文学会の機関紙『モンゴル文学』創刊号は、『モンゴル研究』創刊から35年の時を経た2010年に発行された。

荒井幸康(当時、北海道大学スラブ研究所研究員)が発行実務にあたった『モンゴル文学』第2号出版の頃、谷博之が、『モンゴル文学』誌の翻訳編を構想し、WEB上での翻訳配信の試みを始めていた。モンゴル文学の普及に重要な意義をもつこの企画は、残念ながら、谷の急逝によって、継続が困難となったが、彼の試みは、2017年ロドイダンバ基金によってウランバートルの ADMON 出版から刊行された《現代モンゴルの小説》『私たちの学校』(Ch. ロドイダンバ著、タニヒロユキ訳)に結実している。

幾多の困難をのり越え、日本モンゴル文学会は発展を続け、藤井真湖(愛知淑徳大学教授)の協力で名古屋でも研究発表会が開催された。また、テレングト・アイトル(北海学園大学教授)の協力により札幌の北海学園大学人文学会との共催での国際シンポジウムを実施した。さらに、その成果を中心とした論文を収めた『モンゴル文学』第3号は、内モンゴル師範大学教授ドロンテンゲルらの尽力により、2018年、中国で印刷された。

翌2019年6月にはフフホトでの国際モンゴル文学研究会の実施、2023年8月には日本モンゴル文学会50周年記念国際学術会議がウランバートルで開催され、「モンゴル文学研究国際協会」が設立され、日本モンゴル文学会から会長、事務局長2名が運営評議会メンバーとして指名された。かくて、日本のモンゴル文学研究の細くて長い道に、国際ハイウェイへ合流する新たな道路元標が置かれた。

2025年11月には、日本モンゴル文学会は、モンゴル国との共催でナツァグドルジ生誕120年記念へ向けた学術会議をウランバートルで開催した。このタイミングで、日本モンゴル文学会現会長岡田和行に松田忠徳以来2人目となる D. ナツァグドルジ賞が贈られた。

こうした発展が可能になったのも、『モンゴル文学への誘い』以来のメンバーたち、わけでも、WEBサイトの維持をはじめ、縁の下の見えないところで、献身的な協力をおしまなかった、深井啓、阿比留美保、荒井幸康らの支えがあったからである。

筆者は、日本モンゴル文学会を代表する仕事を、岡田会長、アイトル事務局長に任せ、コロナ禍以降は、幾つかの国際会議に、名誉会長として挨拶文を書いたり、ビデオレターで挨拶をしたりする程度のことしかしていない。最新の国際学術情報については、『モンゴル文学』や『日本モンゴル学会紀要』の学術情報欄等に詳細が記されているので、そちらをご確認いただきたい。

## II. 日本におけるモンゴル文学研究の現在地

### 『日本モンゴル映画祭』から

2025年7月、『日本モンゴル映画祭』と銘打って、モンゴル映画の1週間連続上映企画が第七藝術劇場で行われると聞き、出かけてみた。劇場の前で、大阪外大モンゴル語OBの後輩二人と出会った。その日、老人たちが一緒に見た映画は、バトバヤル・チョグソム監督の『ホワイト・フラッグ』(2023年)という作品だった。

見終わって、これから、飲みに行くという比較級で若い二人と別れた後、十三から神戸方面に向かう電車の中で映画を反芻した。

この作品の監督が、アメリカ映画や西ヨーロッパ映画だけでなく、ロシアや中国などで作られたモンゴルを描いた映画もしっかり見て育った人物であることはよく分る。映画は、それなりに楽しめたとし、懐かしいモンゴルの光景、モンゴル人演者の演技にも好感がもてる。しかし、すべてで、「あの映画のあの場面だよ」というほど、はっきりと指摘はできないのだが、幾つかの映像表現に既視感を覚えた。少し辛口に言えば、映画をお勉強してきた優等生的な要素と、丁寧に扱うべき素材を粗雑に放り出したようなところがあるというところだろうか。WEB上で読んだ英文のレビューも同ような点を指摘していたように思う。

勿論、こうした印象批評に大した意味はないのだが、やはり、一番気にかかったのは、タイトルである《ホワイト・フラッグ》である。

監督が来日して、初めて日本でこの作品が公開された折も、観客から、原題の意味を問う質問がでたようだが、監督は賢明に明言をさけたらしい。

監督と脚本を兼ねるバトバヤル・チョグソムはスイスで生活しているモンゴル人らしく、WEB上のインタビューにも英語で答えているので、日常言語としてはドイツ語やフランス語ではなく英語を使っているのかも知れない。映画の原題はモンゴルでも、英語のWhite Flag だという。この映画の製作国(資本を出した者の帰属)は、モンゴル、スイス、日本となっているので、モンゴル語の題でもよかったはずだが、何故、モンゴル語での「白い旗」ではなく、White Flag だったのだろうか？

筆者は、この映画のタイトルから、「我らが勝利」(阿比留美帆訳『日本とモンゴル』(139号・140号合併号2020年)というJ.ルハグワの小説を思い浮かべた。

ハルハ河戦争(ノモンハン事件)に従軍し、勲章を授与されているデンデブ爺さんは青空市場で、自分も貰うはずだったがなにかの手違いで貰いそこねた《我らが勝利勲章》(対日参戦勝利勲章)が売りに出されているのを見て、買おうとするのだが、モンゴルの通貨では若い売り手に相手にされず、勲章は目のまえで、日本人の観光客にドル札で買われてしまう。かつて「白地の旗」を掲げて降った日本人が、緑色の札をかざせば、勝ちだということかと自問しながら市場を去る。

この映画は、犯罪ミステリ仕立てなのだが、ラストは、かなり、open-ended である。監督としてはラストの解釈やタイトルの意味するところは観客に委ねることなのだろう。しかし、タイトルが英語のWhite Flag である以上、それは敗北宣言、休戦要求を意味するはずで、「白い旗」は乳製品販売中だとか、映画の文脈上の別商売の営業中とか、あるいは清浄性や完全性のメタファーだとかではないだろう。White Flag が明らかに、降伏を意味しているのであれば、一体、誰が誰に降伏するの

か・・・銃を背負い全裸で馬を駆って駅に向かう女は勝者なのか、敗者なのか、刑事として殺人犯を追いかめた男は勝者なのか、敗者なのか、女を裏切った女は敗者なのか、勝者なのか、抑圧者や裏切られた者は・・・

モンゴルの映画としては、珍しく LGBT を描いた作品として賞を獲得したというこの作品で扱われる要素は、女性への暴力、同性愛者への差別、都鄙の生活格差、繰り返される不倫、愛の不毛といったことであり、とりわけモンゴルのなわけではない。

世界中どここの国にでも存在し、人々を苦しめている課題である。つまり、国民性だとか、民族文化とかとは無縁の、現代の人類にとって普遍的な課題、つまり「わたしたち」の問題である。

日本モンゴル映画祭のフライヤーが謳うように、「モンゴルってどんな国」がこの映画から分かるとすれば、「モンゴル人もわれわれも同じなのだ」ということであろう。

2025年、柚木麻子や王谷昌の小説の英語翻訳が高い評価を受けたことが報じられたが、その作品が日本的であるから評価を受けたわけではない。それは受賞対象となった作品を読めば明らかだ。日本語の読者も英語の読者も、とてつもなく奇異なキャラクターにも抵抗なく、自己を投影することができるのだ。道具立てや場所の他に、多少の「日本らしさ」があるとしても、作品理解の鍵になるようなことはない。

彼女たちの書く小説は、かつて、西洋文学モデルを通して形成されてきた国民文学としての「日本文学」の中の作品であると同時に、運命共同体的地球市民社会全体を包含するマーケットの中のコンテナなのである。

White Flag を鑑賞して、いまから、30年以上前の「モンゴル映画祭」のレビューとして、雑誌に掲載された海野未来雄の「モンゴル映画人たちの息吹」(Image Forum 93・Dec pp.56-59)という記事のことを思いだした。

海野は、『モンゴルの息子』(1936年)との比較を通じて、『ゴビの蜃気楼』(1980年)を評して次のように言う。

モンゴル人と土地という問題は、実は我々日本人の感覚と大分異なっている。・・・中略・・・それは一族と言う集団としての土地への関係性ではなく、個人的な一対一の関係性なのである。この映画ラストシーンで、一度は故郷を離れる決意を固めた運転手を、結局は再びゴビに引き戻したのは、娘に対する慕情といよりもそうした慕情の染み込んだゴビという大地そのものであったのだ。そして、この映画が単なる恋愛喜劇を超えて一種の哀愁をもって私たちに迫って来るのは、人間と大地という根源的なつながりを、ゴビ地方の自然の中にこの監督が描いてみせたことによる。

White Flag では、海野のいうモンゴルの特性である個人と大地の関係が見えてこない。主人公が辿り着く場所は田舎と都市を結ぶ鉄道の駅である。

個人的な人間と大地という根源的なつながりは、45年程の間に失われてしまったということなのだろうか？もし、そうであったとしても、White Flag の制作者は、それを嘆いているのだろうか？

余所者のモンゴリストは誰でも、多かれ少なかれ、モンゴルやモンゴル人の文化の中に、なにかしら、他とは違う弁別的な特徴、つまり、「モンゴルのなもの」を見つけることへの期待に応えようとする無意識の癖のようなものを持っているのではあるまいか。

文学研究に限らず、これまでの日本のモンゴル研究にそうした傾向があったのではないか。文学研

究の場合、それがかえって、モンゴル文学を一般の読者から遠ざけてきたのではないか。最近、モンゴルからの招待をもらっても、なかなか腰があがらないのは、長年、モンゴルに対するオリエンタリズムを批判してきた自分が、「逝きし世の面影」を今日のモンゴルの中に見られないことを恐れているのではないかと思うことさえある。

これはあくまでも個人的、あるいは世代的な問題であって、一般化できることではない。  
今日の日本のモンゴル文学研究の水準を示すのは以下のような取り組みである。

### 阿比留美帆の仕事

阿比留美帆(東京外国語大学非常勤講師)は、間違いなく、現在、日本のモンゴル文学研究の分野で最もアクティブに活躍している研究者、翻訳家の一人である。

最近、活字になった翻訳、紹介だけを列記してみる。

2024年11月 佐野洋子『100万回生きたねこ』をモンゴル語に翻訳、モンゴルで出版。

2025年1月「モンゴルの現代詩」としてウランバートル出身の若い世代の詩人から B. バトザヤ、J. テグシザヤ の詩を翻訳、紹介。『モンゴルウォーカー Premium Vol.4』モンゴルウォーカーマガジン株式会社。

2025年5月「モンゴルの現代詩」D. オリアンハイの詩11篇を翻訳、紹介『日本とモンゴル No.145』モンゴル協会。

2025年6月「自然を想う抒情詩」B. ヤボーホラン、D. ニヤムスレン、L. ウルズィートウグスの詩を翻訳、紹介雑誌『TRANSIT 68号』。

書店葉々社主催の「アジアの文学の日」トークイベント。モンゴル文学や注目の作家について紹介。

2025年9月 L. ウルズィートウグスの短篇「アクアリウム」の翻訳、紹介 『翻訳文学紀行 VII』ことばのたび社。

これら活字メディアだけでなく、「モンゴル・ポエトリーナイト」、「モンゴルの詩をよむ会」などを継続して開催し、そうした取り組みの中では、Jazz 奏者、馬頭琴やオルティンドーなどの若いモンゴルアーティストとコラボし、また、その活動に関する情報を、SNS を通じて広く発信している。

重要なことは、これらの活動の結果として、多くの人が「モンゴルの文学を読みたいな」と思い、WEB 上の彼女の訳した詩や小説を通じて、モンゴル文学ファンになっているという事実である。

こうしたことは、20世紀末、日本モンゴル文学会が WEB ページを立ち上げたときに夢想していたことではあるが、当時、それはまだ夢の領域にとどまっていた。

日本におけるモンゴル文学研究の現在の到達点を示すに足る「モンゴル文学のファンを増やす」という仕事を軽やかに(本当はとても大変な苦勞を伴うのだろうが)行っている阿比留の仕事の具体例をひとつ紹介しておきたい。

「ジェンダーの視点からモンゴル文学を読む：近現代小説の中の＜女性像＞を中心に」(北方民族文化シンポジウム網走報告 37 巻 2024 年)と題する研究発表である。

阿比留は、その中で、1940年代、Ts. ダムディンスレン描いた女性像と1960年代、Ch. ロドイダンバの描いた女性像を比較した後、「民主化」後2000年代の女性像として、女性作家 L. ウルズィートウグス(1972-)の2002年の短編小説「アクアリウム」をとりあげている。

「アクアリウム」という作品は、「ある日突然魚に姿を変えられた“私”」が、子供部屋の小さな水槽か

ら覗きみる家族の姿に一喜一憂し、また人間に戻るまでの様子が一人称で語られる。カフカの『変身』をオマージュした小説と紹介される。(全文の翻訳は『翻訳文学紀行 VII』ことばのたび社所収)そして、以下のように言う。

先に挙げた二つの作品(引用者注「ソリを替えたら」「清きタミル川」をさす)とは表現手法も主題も異なるが、先の二つの作品にはある意味、理想の女性像が描かれていたとすると、ここでは妻の目からみた自分と他者の関係性、人がもつ二面性、自己像と実像のずれという視点が描かれている。物語のラストで、“私”が再び魚になることを選択し、今度は「もっと小さな水槽を」と望む行為は、現代の都市空間における孤独と閉塞感を象徴すると同時に、妻や母という役割から離れた「個」としての自分とは何かを問いかけるようでもある。

女性の身体感覚や内面を繊細に描くことで、ウルズィートウグスの詩や小説は「女性的」、「女性ならでは」と形容されがちだが、そうした安易で二元論的なレッテル貼りを拒むかのような、あくまで「個」を掘り下げていくスタイルこそがこの作家の持ち味であると言っている。彼女は詩、小説のジャンルでジェンダーを含む様々な固定観念に縛られない自由なイメージに溢れる作品を発表し続けている。

阿比留が指摘するように、L.ウルズィートウグスのような今日的な(contemporary)モンゴル文学を読むとき、他のすべての国や地方の「いま」の文学と同じ目線にならざるを得ないのである。そこでは、もはや「モンゴルのなもの」探しは主要な課題ではない。

都会の個の孤独と憂いを同時代の地球市民と共有するモンゴル人には、海野の語った「人間と大地という根源的なつながり」は喪失されているとも言える。

勿論、モンゴル人のすべてがというわけではない。『日本とモンゴル No.145』(2025年)では、阿比留はタイプの全く異なる男性詩人の紹介を行っている。1941年生まれの伝説的文学者ダムディン スレンギーン・オリアンハイである。

阿比留はオリアンハイの詩の翻訳に付した詩人の紹介文にこう書いている。

「モンゴル最後のマルキシスト」を自称するオリアンハイの思想の根幹には、「この世界の何ひとつとして私が所有するものはない」という考えがあり、“私有財産”という概念が人や社会を冷酷でエゴイスティックなものにすると説く。国の高位の賞にノミネートすることを推薦者らに打診されるも、「私は祖国を心から尊ぶ。だが、国が貧困者や浮浪児を一人も出さない社会を実現できないうちは、私は国からの賞は受けない」と言って固辞したというエピソードは有名で、信念に基づく一貫した態度は多くのモンゴル人の畏怖と尊敬を集めている。

モンゴル現代詩を代表する詩人のひとり、牧民の子、オリアンハイは、今日の平均的モンゴル人とは異質の存在である。だからこそ、畏怖の念を抱かせるのである。しかし、それをモンゴルの特質と呼び得るだろうか? いや、そうではあるまい。実存的な問いを抱き続け、世に抗って、詩を書き続ける行為は、古来どのような属性の人間集団においても、普遍的な営為であり、それこそが、詩人を詩人たらしめているのだ。

モンゴル文学を読みたいという人たちがいて、詩人や作家のところに寄り添う誠実な翻訳者が

いれば、モンゴル文学は、翻訳を通して、「世界文学」として存在する。ただ、それは世界市場で高い商品価値をもつということと決して同義ではないのである。日本の市場でのモンゴルの文学にはいまだに「モンゴルの」が求められている。

だからこそ、阿比留の仕事に倣う人々が次々に出てくれるようになればよいと心から思う。

文学作品の翻訳は面倒である。翻訳である以上、読み違い、誤訳やケアレスミスは訂正し、翻訳のルール違反は互いにチェックし合わねばならない。しかし、なにより、文学作品は文学として翻訳されねばならない。テキストに現れる文学の言語は日常の言語から「異化」されたものなので、缶詰の開け方の翻訳と同じようにはいかない。その点で、阿比留の翻訳には「文学を文学として訳す」ことへの覚悟が感じられる。

モンゴル文学を扱う人間が度々経験し、時として萎縮してしまう要因のひとつは、モンゴル語が出来る「識者」から「ケチ」をつけられることである。

確かに、稀に、モンゴル文学をマイナーな存在と高を括り、先行の日本語訳やロシア語訳の検討もろくにせず、しれっと、英語訳から重訳したり、学生の下訳を適当に手直しをすればよい程度に考えたりする紹介者が出てくる可能性はあるので、批判が全て悪いというわけではない。しかし、「何故、この語をこう訳したのか、この語の本来の意味はこれ、これであり、こう訳したのでは全くの誤訳だ」とか、「このセンテンスは、文法的に、これ、これの構造になっているのに、こんな風に訳すと原文の形が再構成できない」とか、果ては、「こんな意識は論外だ」と言ったような指摘まである。

「そこまで言うなら、手前が全部訳してみやがれ！」と言い返すかわりに、つつこみを回避するために日本語にモンゴル語のルビをふったり、あえて、逐語直訳的に訳したりする人もいる。しかし、それでは商品レベルの文学作品の翻訳にはならない。原語の文学性を別の言語の中の文学性に翻訳して送り出すのが文学作品翻訳者の使命である。

筆者はお金のとれる翻訳家ではないのだが、モンゴル語聖書翻訳に関する本を出していたりするので、時折、間違って、翻訳のアドバイスを求められることがある。答えはいつも決まっている。「文学性の巧拙やセンスを気にするより、まず、自分の訳文を何度も声に出して読んで下さい。言語の芸術は、とりわけ《声のある文学》の特性を残すモンゴル文学の場合、文字よりも音が命です。臆病になってはいけません。オリジナル言語の文学性と日本語の文学性の対話を経験できることこそが翻訳者の冥利なのですから。」

しかし、こうした面倒で面白い文学の翻訳や研究の仕事がいま大きな岐路に立たされている。

### Ⅲ. 人文学を襲う津波とこれからのモンゴル文学研究

#### 人文情報学という津波

半世紀前、『モンゴル研究』創刊の頃、大阪外国語大学には、ワープロもPCもなかった。学生時代、θとYを追加したロシア語仕様特注品のオリベッティ社のタイプライターを大学生協で大枚を払って購入した。勿論、手動である。

ワープロが登場してからも、最初の頃は、モンゴル語は、ローマ字転写するか、キリル文字に自作の外字を組み込むか、しか方法がなかった。PCが使えるようになって、伝統モンゴル文字のフォントを自作したり、その印刷画面確認のために、Macのモニタースクリーンを物理的に90度回転させ



たりしなくてはならなかった。そんなことをいまの若者に話しても、「五右衛門風呂の下水板」並みにイメージできないに違いない。

今日では、D. ナツァグドルジを日本版 Wikipedia で検索し、ヒットした項目からモンゴル版 Wikipedia へジャンプさせ、そのモンゴル語記事をブラウザの機械翻訳機能で日本語にして、二つの記事の相違点を書きだすのには数分あれば十分だろう。まさに、隔世の感である。

Google 翻訳にモンゴル語のサービスが加わったばかりの頃、メールを書くのに使ってみて、ほとんど使い物にならないと思ったことを覚えている。しかし、いまでは、機械翻訳は遠隔会議の字幕に使えるほどの精度まできていると言う人もいる。確かに、以前はモンゴル圏の知らない人から日本語で送られてきたメールが機械翻訳によるものだとすぐに分かったが、最近では判断が難しい。少なくともビジネスレターや缶詰の開け方くらいなら、機械翻訳でも全く問題ないレベルまできていることは間違いない。多言語対応の機械翻訳が文学作品に及ぶことはもはや避けられない。

しかし、便利な世の中になったものだと思われたい文学者、文学研究者はどれくらいいるのだろうか

いま、あらゆる国や地域の文学とその研究に、新たな危機が津波の如くおし寄せている。

デジタル技術や AI を使った人文科学分野の「イノベーション」が、デジタル・ヒューマニティーズ、デジタル人文学とか人文情報学とかいわれるもののトレンドとなって、知的な領域をのみこもうとしているのである。

例えば、日本では、2025年7月、著作権保護期間が満了した文学作品を収集・公開する「青空文庫」のデータを、大規模言語モデル (LLM) と検索拡張生成 (RAG) 技術を応用し、対話形式で探索・分析できる AI システム「Humanitext Aozora」が開発され公開されたと報じられている。

この「Humanitext Aozora」には、以下のようなモードがあるとされる。

Q&A モード：テキストに関する事実に基づいた問いに対し、簡潔な回答と正確な典拠(作品名、該当箇所など)を提示する。事実確認や情報収集に適している。

詳細解説モード：文芸研究者のように、複数の典拠を比較・分析し、時代背景や文脈を補足しながら多角的な解釈を提供する。作品理解を深めるための補助ツールとして機能する。

対話モード：指定した作家(例：芥川龍之介)や作中の登場人物のペルソナ(文体、思想、口調)を AI が再現し、利用者との対話を行う。文学の世界への没入体験を提供する。

創作モード：指定した作家の文体を AI が分析し、そのスタイルを模倣した新しい文章を創作する。文体研究や創作活動の支援を目的とする。

そして、これらのモードは、「単なる情報検索ツールに留まらず、利用者が文学作品と多角的に関わるための新たなインターフェースを提供するものである。」と説明されている。(https://humanitext.ai/ja/apps/aozora/)

こうしたトレンドは、既に10年ほどまえから始まっている。2016年から、情報・システム研究機構・データサイエンス共同利用基盤施設において、国文学研究資料館が中心となって推進する「歴史的典籍 NW 事業」や「日本古典籍データセット」で、古典籍の画像データをダウンロード可能な形式で提供し、くずし字を対象とした文字のデータセットを公開し、機械学習を用いた文字認識や、テキスト化に向けたアルゴリズム開発のための学習データとして使用可能にしている。

ことは文学のことだけではない、WEB を覗いてみると、驚くことに、哲学専攻の研究者も LLM の

AI を駆使して、効率よく論文を書くことを勧めているのである。

当然、中国は、こうした分野への研究投資を前のめりに進めており、各大学でも多くのシンポジウム等が行われていると聞く。モンゴル国においても、写本や印刷物のデジタル化はかなり前から始まっているので、日本の文学での取り組みに類することへの用意はあるはずである。

いまから、20年ほど前、2006年、モンゴル建国800周年にして、D. ナツァグドルジ生誕100周年記念の年、筆者は、1920年代末から1930年代末頃に書かれたD. ナツァグドルジの手稿のデジタル・データ研究の重要性についての発表をウランバートルでのモンゴル学会議の席上、英語で行った(『モンゴル研究 No 24』2007年に日本語版掲載)。

劣化が急速に進む歴史資料である文学者の手稿をデジタル化して保存し、併せて、手稿のデジタル・データの解析と色調操作により、上塗り削除された部分を再構成する試みの可能性についてである。

科学アカデミー言語文化研究所の Kh. サンビルデンデブとアイメジャーの一ノ瀬修一、凸版印刷株式会社(現在の TOPPAN)の加茂竜一、通訳者としてナチンションホルらの協力で作成した高解像のデジタル・データとその分析、再構成のヒントは、すべて、モンゴル科学アカデミー言語文化研究所に提供し、その後の成り行きに注目してきたのだが、いまだ芳しい報告を受けていない。当時の責任者であり、共同研究者であった Kh. サンビルデンデブが2006年冬の北京での国際学会議をまたずして急逝し、筆者と科学アカデミーのやり取りを詳しく知っていたはずのプレブジャブも不慮の事故で世を去ったいまとなつては、モンゴル国でこの仕事を引き継ぐものがあるのかどうかさえ分からない。

20年前の提案は、いま、AI の力でもっと簡単に実現させることができる。伝統モンゴル文字のモンゴル語のコーパスとナツァグドルジの全草稿のデジタル情報を AI に学習させれば、ぼんやりとしか見えなかったものが、ありありと見えてくるはずだ。筆跡についても、真筆が確認し得るナツァグドルジの手帳のデジタル化は既にできているので、筆跡を鑑定することは容易で、様々な印刷草稿の書き手がナツァグドルジ本人であるか否かも簡単にわかる。

さらに、同時代の詩人、作家の手稿の学習により、AI は文体や発想の典拠についても明らかにする可能性が高い。ナツァグドルジが後の世代にどのような影響を与えたかも分かる。(直接与えた影響は、想像されるほど、大きくなかったことが明かされるだろう。)

しかし、こうした作業を本当に実りあるものとするためには、研究を情報技術者とアルゴリズムにだけ任せしておくことはできない。

AI が何を学習すべきなのか、そのデータを吟味していなければ、AI の出す答えは無意味なものになる。1940年代後半から今日に至るまでモンゴル語で書かれたD. ナツァグドルジと彼の作品に関する記事はまさに山ほどあるが、正確な情報や、文学的な価値のある論考は極めて少ない。引用に引用を重ねたバイアスだらけのデータを、とりあえず AI に放り込んで、Deep Learning させても、アウトプットされる情報は真実とは全く似ても似つかぬものになるだろう。

かつて、洋の東西を問わず、文学研究は、古典や作家の著作を、写本や手書き草稿から、校正原稿、印刷各版各刷りに至るまで蒐集し、それらを比較検討し、本文となるテキストを定め、一生をかけて語彙や用法を抽出し、カタログ化するような仕事の上になりたっていた。今日、そうした仕事の多くは、徒勞であり、そんな非効率な仕事をする、お金を生み出さない学域には、「イノベーション」が必要だと思われているのである。

AI 利用で、今はノーコードの時代になったと言われる。LLM(大規模言語モデル)の登場により、

プログラミングの知識なしでソフトウェアを開発できるようになったからである。しかし、AIが勝手に作りだした芥川龍之介の実存的問いに答えて、小学生がAIとの対話により創作した芥川風の小説を芥川の筆跡で生成した画像データを、未発見の草稿のコピーと峻別するのは一体誰の仕事だろうか？コードを書くか否かは別にして、道具を使うのは人間であり、AIもそれを認識している。

最も注意すべきことは、AIは意識をもたないという事実である。将来、AIが意識をもつと主張する研究者もいるが筆者はそれを信じない。AIは自分が人間によって作られたことを正確に理解しているからである。従って、AIが実存的な問いをもちたくても、もつことはできない。おのが存在の神秘を問わない意識は意識ではない。意識がなければ、何が美しいのかを自分で決められないし、美を味わうこともできない。それでもAIは、尤もらしい文章を拾い出して、まとめを作り、さらには意識らしいアルゴリズムをつくり出すかも知れない。しかし、AIに真に実存的な問いがないことを、われわれが知っている以上、当然AIもそれを知っているのである。

スピリチュアル・キャピタルを満足に持たぬ無定見な人々によって、ノーム・チョムスキーでさえ、あるいは、チョムスキーだからこそ、厳しく批判した大規模言語モデル(LLM)に依拠した人文学のAI化が推し進められていくなら、文学部が次々に閉鎖され、既に廃墟同然の高等教育機関において、文学の研究や教育はさらに厳しい状況に追い込まれるだろう。

新自由主義者が保守主義者を僭称する世の中である。ソ連崩壊直後のように、詩人や学者が国家のリーダーになることはもはやなく、大国のリーダーに品格を求めることなど望むべくもない時代だからこそ、哲学や文学の価値が見直されなくてはならないと、多くの人々が気づきはじめている。

いまのところ、モンゴルが受け入れ、育んだ「遊牧」というイノベーション以上にモンゴル人の幸福を実現し得えた産業的イノベーションは起こっていないように思える。

遊牧民であれ、農民であれ、狩猟民や漁民であれ、工場労働者であれ、ケアワーカーであれ、ブルシットジョブ管理職であれ、人間と大地という根源的なつながりの喪失と回復は、世界のすべての人々にとって、普遍的な課題である。

これからのモンゴル文学の研究の目指すのは、AIによる機械翻訳の精度をあげることで、モンゴルのもの探してもない。それは、モンゴルの詩人や作家がいかに、人間と大地という根源的なつながりの喪失と切り結んでいるかを、人間の生身を通して明らかにすることではないだろうか。

## おわりに

50年前に大阪外国大学モンゴル研究会の文学部会の学生たちによって、拓かれたモンゴル文学研究の細い「けものみち」は、他の人々が拓いた道と交わり、いまや大道となった。これから、さらに、遠くまで進んでいくだろう。

モンゴル研究会文学部会も、日本モンゴル文学会も、「制度としての学問」のための権威主義的な所謂「学会」ではなくて、モンゴル語とモンゴル人の言語芸術、最も広義の文学を愛する人のする人たちが、なんらの束縛も受けることなく、自由に語りあえる場所であった。どうか、これからもそういうものでありつづけてほしいと、切に願っている。

50年前の学生たちはモンゴル研究に必要なものを自分で作ってきたのだが、筆写するより、コピーをとった方が早く、効率的だと思ったし、貴重な講演はノートをとるより録音の方が正確だからと

大きなカセットデッキを担いで講演会場へ行った。高校生の頃、知的生産の技術で推奨されていたのは京大型カードをカードボックスに並べることだったが、いろいろ便利な道具が登場するたびに嬉々として使い、生産性の向上や効率化ができたと思った。

しかし、中等教育、高等教育現場の職責をすべて終える頃になって、ようやく分かってきた。人文知、あるいはエビステマーとも呼ばれる学知にかかわる仕事において、「効率化」や「イノベーション」が何をもたらすのかということ。それは人々のこころの果てしない荒廃である。

常にイノベーションを求め、求められ、「業績」をあげることが自分の存在証明だと信じて、グローバルな市場の中で、搾取に甘んじ、収奪に加担することにさえ無頓着になる人々がいかに多いことか。せめて、その人々が幸福を感じていればよいのだが、実際にはそうでもない。

だが、悲観するのは止めよう。これを読む若い人たちがいたら、どうか忘れないでほしい。

学問は苦行ではない。学問は人類の共通善に資するものであり、人生の喜びである。その証拠に数十年前に『モンゴル研究』に投稿していた学生が、ビジネスキャリアを全うしてから、紙の辞書の埃を払い、好きな詩の翻訳に再挑戦して、『モンゴル研究』最新号に新訳を投稿している。市井にあって様々な仕事をこなしながら、常に学び続け、喜寿に近づいてなお大学院で学び続けている研究会発足時のメンバーもいる。

人は幾つになっても学べるのである。非人間的なシステムに「自発的隷従」することなく、自信をもって、自分の好きな不便で非効率的なやり方で、あなた自身が拓く「けものみち」を歩んでほしい。

ただし、誰かが拓いた道も同じ道を通る者がいなければ、やがて、草木や砂に埋もれてしまうだろう。「けものみち」を共に往く仲間があれば、どんなに細い道であろうと目的の場所まで辿りつけることを『モンゴル研究』の50年の歴史は教えてくれている。

今日、高齢化が進む国々の学術団体はどこでも、組織の世代をこえた継承に困難を抱えている。モンゴル研究の領域とて例外ではない。「時代が変わったから」と言って止めるのは簡単である。しかし、モンゴル研究会は、いつも簡単な道を選ばない。

創刊50周年を迎えた今年、また、あらたな1冊の編集に取り組むモンゴル研究会の勇気と努力を称えとともに、創刊号編集者を代表して、深甚の感謝を捧げたい

(しばやま ゆたか)